

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：33906

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00243

研究課題名(和文)21世紀のメディア環境における「ラジオドラマ」の意義に関する総合的研究

研究課題名(英文)A Comprehensive Study on the Significance of "Radio Drama" in the Media Environment of the 21st Century

研究代表者

広瀬 正浩 (HIROSE, Masahiro)

椋山女学園大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：80613299

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究プロジェクト「21世紀のメディア環境における「ラジオドラマ」の意義に関する総合的研究」は、視覚的なメディア表現が氾濫する21世紀の日本において、音声情報のみで物語を構成する「ラジオドラマ」の意義を検証するものである。

今日、ネットを介した視覚情報の送受信を軸に、即時性の強いコミュニケーションが標準化している。視覚的な情報を制限して聴覚的な情報に特化した表現技術である「ラジオドラマ」はたしかに歴史的に構築されたものではあるが、その表現に内包される様々な特徴(日常音への想像力、触感の喚起、物語の解釈の多様化など)は、別のメディア表現の契機にもなることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

視覚的なメディア表現が氾濫する21世紀の日本において、「ドラマ」と言えば映像表現(テレビドラマや映画)が一般的である今日、そもそも「ラジオドラマ」の意義を再評価する試み自体が希少である。ラジオドラマを歴史的な資産としてのみ評価するのではなく、現代の「声優文化」などとも接続させながら、現代の人々の聴覚性以外の感性を成立させる者としてラジオドラマの可能性を見ようとするところに、学術的意義がある。

また、視覚的な情報の送受信をベースとしたコミュニケーションが標準的な現代におけるラジオ放送の役割についても見直しているところに、社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：This research project, "Comprehensive Research on the Significance of 'Radio Drama' in the Media Environment of the 21st Century," aims to develop the concept of 'radio drama,' in which stories are composed only of audio information in Japan in the 21st century, where visual media expressions are flooded. This is to verify the significance.

Today, communication with strong immediacy is standardized, centering on the transmission and reception of visual information via the Internet. "Radio drama," an expression technology that restricts visual information and specializes in auditory information, is certainly historically constructed, but the various characteristics contained in that expression (e.g. Imagination, arousal of tactile sensations, diversification of interpretations of stories, etc.) can also serve as opportunities for other forms of media expression.

研究分野：人文学

キーワード：ラジオドラマ サウンドスタディーズ メディア表現 読書 音読・朗読・黙読

1. 研究開始当初の背景

本研究プロジェクト「21世紀のメディア環境における「ラジオドラマ」の意義に関する総合的研究」は、視覚的なメディア表現が氾濫する21世紀の日本において、音声情報のみで物語を構成する「ラジオドラマ」の意義を検証するものである。

日本でラジオの本放送が始まったのが1925年であったが、当初から、物語を音声情報のみで構成した「ラジオドラマ」は有力な放送コンテンツであった。しかし、1950年代にテレビが全国的に普及するようになると、ドラマと言えば「テレビドラマ」を指すようになり、ラジオドラマというメディア表現は徐々に衰退していくこととなった。しかしこのことは、単に物語表現のメディアが新しいものに置き換えられた、ということだけを意味するものではない。ラジオドラマの受容を通じて聴取者のうちに形成されたはずの、音声を聴くだけで目に見えないものを想像し、実在しえないものに実在感を感じるという感性が、旧時代のものとして位置づけられたことをも意味するのである。「ラジオドラマ」の隆盛と衰退は、感性の歴史の問題なのである。

このようにテレビドラマや映画などを中心とする視覚的な物語表現が一般化している状況は、21世紀に入ってから基本的には変わっていない。特に視覚的な物語表現の中でも、アニメーションやビデオゲームが若者に人気のポピュラー文化のコンテンツとして受容され、それらの映像・動画視聴がネットを介して行われるようになってきている。しかし、そのような視覚的な物語表現が全盛の状況下で、ラジオドラマをめぐる新たな展開が生じ始めている。アニメーションやゲームなどのヴィジュアル・カルチャーから「声優文化」が形成され、それにより、声優が演じたキャラクターたちの物語の受容とは別の次元で、声優たちの「声」を商品として消費するという聴取者の受容態度が成立するようになるのである。そしてそのような「声」の商品化の一環として、改めてラジオドラマが注目されるようになったのだ。ラジオドラマは「ドラマCD」という呼び名で声優ファンのリスナーに親しまれ、そこから「シチュエーションCD」「朗読CD」などのサブジャンルも形成されるに至っているのである。つまり、従来の「古い表現ジャンル」としてのラジオドラマとは異質なものとして、「21世紀のラジオドラマ」が成立しているのである。

だが、このような文化状況についての学術的な検証は、ほとんど進んでいない。映画研究は盛んだが、ラジオドラマ研究は盛んだとは言えない。そこで、聴覚的な物語表現の存在意義を認めながら、視覚的なメディア表現が氾濫する21世紀における聴覚的な経験の質を、感性の歴史の問題を、学術的に検証することが、今日必要とされていると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、21世紀になってその隆盛が顕著となった声優文化を背景にして成立している新しいラジオドラマの表現群がどのように制作され、どのようにして聴かれているのか、様々な立場の当事者の発言を聴取・採集し、それらを文学理論・分析哲学などの方法を導入して検証することを目的とした。そして、テレビドラマ全盛期以前のラジオドラマがどのようにして作られて聴かれてきたのか、雑誌『放送』などの史料から調査することで、当時のラジオドラマと21世紀のラジオドラマとの間にどのような連続性あるいは断絶性があるのか、考察・検証することも目的とした。

だが、本研究の射程は、聴覚的な物語表現に限定するべきものでもないとも考えた。様々な質のメディアテクノロジーが発達する現代において、「物語文化」というものがどのように成立しているのかということも明らかにしなければならないと考えた。その上で、現代のラジオ放送が聴覚的な情報の伝達の意義をどのように捉えているのかについても考慮しなければならないとも考えた。

3. 研究の方法

広瀬正浩(研究代表者)の研究の特徴は、文学理論を基盤として、ラジオドラマの物語構造や表現構造の分析が可能であることと、ラジオドラマに何らかの形で関わった者たちの言説を分析することが可能であるという点にある。また、聴覚文化研究の業績の蓄積を基盤として、聴取者は音声を通じて発信源の身体性・物質性をどのように知覚するかという観点から、ラジオドラマを定義づけることが可能である点も、広瀬の研究の特徴であると言える。他にも、声優文化の母体とも言えるアニメーション文化についての論文を多数著しており、アニメーション(視覚的なメディア表現)との関連性からラジオドラマを考察できるという点も、広瀬の研究の特徴である。

堀田あけみ(研究分担者)の研究の特徴は、堀田自身の創作活動の経験を基盤として、ラジオ

ドラマの表現だから可能なこと / 不可能なことについて検証を行うことが可能であるという点にある。また、ラジオ放送の現場に関わった経験を基盤として、「文化資産」としての実作者たちへのアプローチの回路を獲得しており、彼らの発言を聴取・採集しやすい状況にあるという点も、堀田の研究の特徴であると言える。

こうした点を踏まえ、本研究では以下の表の①～④の方法で当該研究を行うこととなった。

ラジオドラマに関する言説の採集・整理・分析	
(a) 現代のラジオドラマ制作・放送に携わっている当事者(制作者・演出者・出演者)への聴取	堀田あけみ (広瀬正浩)
(b) 現代のラジオドラマに言及した文字資料およびテレビドラマ全盛期以前のラジオドラマに関する史料(雑誌『放送』などに収録された記事等)の採集	広瀬正浩
ラジオドラマ作品の物語構造・表現構造の分析	
(a) 文字表現と音声表現の比較	堀田あけみ
(b) 同時代的な思潮との影響関係についての考察	広瀬正浩
(c) 虚構世界へのリスナーの没入に関する分析哲学的な検証	広瀬正浩
①～②の過程における研究成果の妥当性を検討する研究会・ワークショップの開催 (aも兼ねる)	広瀬正浩 堀田あけみ
①～③の成果を踏まえた、活字化(論文化)	広瀬正浩 堀田あけみ

なお、研究期間は3年(平成30年度～令和2年度)とした。

4. 研究成果

本研究は、令和2年度から数年間にわたる新型コロナウイルス感染症の感染拡大による社会的混乱(「コロナ禍」)によって、停滞を余儀なくされた。本来は令和2年度末で研究期間を終えるはずであったが、期間延長を2度申請し、研究期間は令和4年度までの5年間となった。

以下、問題意識の推移に沿って研究成果を記述するが、調査・分析・考察と論文執筆・発表の時期はずれていることを断っておく。

(1) 歴史的構築物としてのラジオドラマの確認

*広瀬正浩「寺山修司のラジオドラマ「まんだら」における聴覚的表現の可能性」
(『椋山女学園大学研究論集 人文科学篇』第53号、2022年3月、椋山女学園大学、p.1～12、査読なし)

視覚的な情報技術が発達している現在において、「ラジオドラマ」という表現ジャンルが歴史的なものであることを具体的に確認すべく、寺山修司脚本のラジオドラマ「まんだら」(1967年11月23日放送)を分析した。

脚本を手がけた寺山は「津軽を中心とした東北方言の実在感」にこだわっていた。「まんだら」は全国に放送されているが、ドラマの聴取者の中には「東北方言」に馴染みの薄い者も当然含まれていよう。方言の「実在感」は、聴取者に対し、物語世界と自己との隔たりを強く意識させるものとなる。それは「土俗」性の構成にも深く関係してくる。寺山は「土俗的な死生観の中に日本人の心の故郷を探す」ことにもこだわっていたが、聴取者が「まんだら」の物語世界＝「日本人の心の故郷」を遠くにあるものと感じることで、その「故郷」を「探す」という実践の意義が規定されていく。ラジオドラマが全国に放送されることを通じて、「方言」を取り入れた本作品は物語世界のリアリティを獲得したのである。

また、ラジオドラマは、現代音楽家たちの活動の場でもあった。「まんだら」の音楽を担当したのは、現代音楽家の湯浅譲二であった。湯浅はNHKの電子音楽スタジオを利用して、「まんだら」の「地獄」の音像を電子音楽で構築した(電子音楽については後述)。そして、「まんだら」は当時では希少なステレオ音響で制作された。「まんだら」の存在意義は、日本の音響メディアの発展の歴史のある種の発展の成果として査定されるものであった。

(2) ラジオドラマを構成する音とその意味から、新たな課題の発見へ

物語における台詞やナレーションを担う「声」という聴覚的な表現は、言語を音声化した者であり、この言語の音声化によって物語内容が聴取者によって理解可能なものとなる。そして、音声による物語理解ということ自体は、「音読」や「朗読」などの文学受容の技術や方法によっても可能なものである。一般に、音読や朗読は、「黙読」と対比的な関係にある、と理解されている。しかし、音読や朗読と黙読との間には、どのような違いがあるのだろうか。音声によって物

語を理解するということは、具体的にどのような経験であるのだろうか。また、(6)で後述するように、ポピュラー文化における文学受容の一形態として、声優による文学作品の朗読を収録した「朗読 CD」というジャンルも存在するが、そもそもこうした音源は、国語教育の現場で利用されてきたものでもある。国語教育において、音読や朗読はどのように位置づけられるものであるのか。これらの課題についても、考察しなければならない。

一方、「登場人物たちが引き起こす出来事がどのような空間において生じたものであるかを示す働きをする「効果音」は、物語世界(虚構世界)の日常において聞こえる日常音や環境音であるわけだが、日常音という時には「雑音」として扱われることもあるような音に対する人間の想像力も、時代とともに変化している。実際に、現代では YouTube など「ASMR」(注 4-2)が消費されてもいる。ラジオドラマの理解の支えにもなり、日常生活を送る上でも当然支えとなる「日常音への想像力」がどのような歴史性を負っているかについても、考察しなければならない。

視覚的なメディア表現が氾濫する 21 世紀の日本における、ラジオドラマから派生する聴覚の問題として、以下の(3)～(6)の研究を行うこととなった。

(3) 日常音への想像力の歴史性 その1

*広瀬正浩「機械を通じて“自然”を感じる ―一九三〇年代の日本のラジオ放送における「生態放送」」(『言語と表現 - 研究論集』第 16 号、2019 年 3 月、椋山女学園大学国際コミュニケーション学部、p.5～19、査読なし)

1920 年代後半から 30 年代にかけてラジオ放送においてスポーツなどの実況中継放送の技術が高められていく中で、自然環境にマイクを向けて拾った音声を放送しようとする「生態放送」という試みが行われた。生態放送の聴取者は、ラジオ受信機のスピーカーを通して聞こえてくる「自然音」を聴取して楽しんだのである。ラジオを通じて自然音を聴くことを求めた当時のリスナーの想像力のありようについて、幾つかの資料に基づきながら検証した。

(4) 日常音への想像力の歴史性 その2

*広瀬正浩「環境音を翻訳する ―アニメーション『オトツペ』の存在意義」(古閑章(編)『新薩摩学 15: 古閑章教授退職記念号: これからの学問のエッジを極める』2020 年 8 月、南方新社、p.222～234、依頼論文)

旧環境庁の「残したい“日本の音風景百選”選定」事業(1996 年)を手掛かりに、環境音を聴取する想像力の問題を、「サウンドスケープ」(マリー・シェーファー)の思想を参照しながら考えつつ、NHK E テレで放送中のアニメーション『オトツペ』論へと接続する。環境音をキャラクターへと「翻訳」する『オトツペ』を、環境音に対する私たちの感性の刷新の契機として捉えた。

(5) 物語内容を音声で受容することの意義

*広瀬正浩「読者がその黙読の過程で耳にするもの ―国語教材・文学作品の受容における聴覚性」(『言語と表現 - 研究論集』第 19 号、2022 年 3 月、椋山女学園大学国際コミュニケーション学部、p.5～16、査読なし)

音読から黙読へ これは前田愛『近代読者の成立』(1973 年)などで示された、近代日本の文学作品の受容形態の変化の像である。このような図式は、「音読」と「黙読」が対立し合う二項として認識することを促す。しかし、私たち読者は、その黙読の過程で、どんな音声を聴いているのだろう。音読のときのように自分の声や誰かの声を聴いてはいないかもしれないが、黙読する読者はその過程で、聴覚性に規定された身体を構築している。では、黙読する読者 = 聴取者と虚構世界との間に、どんな関係があるのか。本発表は、音声を介在させずに虚構世界を受容するという「黙読」が読者にとってどのような聴覚的な経験であるのかを問うための、理論の構築を目指した。

(6) 国語教育における音読・朗読

*広瀬正浩「国語教育における朗読 CD ―範読の受容から逸脱するもの」(『椋山女学園大学研究論集 人文科学篇』第 54 号、2023 年 3 月、椋山女学園大学、p.27～37、査読なし)

国語教育において音読や朗読の意義が見いだされるとき、基本的に、その音読や朗読の主体は“児童生徒”が想定されている。音読や朗読は、児童生徒の能力に資するものとして位置づけられている。しかしながら、授業者には教科書会社によって用意された朗読 CD が存在するし、授業で使うか否かは別として、俳優や声優が文学作品を読み上げた市販の朗読 CD も存在している。それらの朗読の主体は言うまでもなく、児童生徒ではない。児童生徒以外の者による音読・朗読は、「範読」としての意義を有するが、範読以外の意義もそれらの中にはある。自らの声では読まれない文章を聴覚的に受容することで、児童生徒がどのような経験をすることになるのかという問題を総合的に考える契機として、朗読 CD を論じた。

(7) 現代のメディア技術の環境の下での物語文化の行方

歴史的構築物としてのラジオドラマの特徴や意義を確認しながら、そこから派生した聴覚の問題や文学の問題について考察してきたが、本研究プロジェクト名にもある「21世紀のメディア環境」に改めてフォーカスしてドラマ文化・物語文化を考えたとき、およそ次の3つの課題が新たに浮き彫りになってくる。

テレビやインターネットなど、視覚的情報の送受信が標準的である現代において、聴覚的な表現に特化した(聴覚的な表現の領域に限定された)ラジオ放送局の存在意義とはどのようなものであるのか。

「ラジオドラマ」というジャンルを超えて、現代的な技術を駆使した音楽表現が、私たちの感性にどのような意味を持ちうるのだろうか。電子音楽については、寺山修司脚本のラジオドラマ「まんだら」を論じた際にも注目すべき対象として挙がっていたが、電子音楽に関する事情についても、確認が必要ではないか。

視覚的な情報伝達技術が標準的である現代において、ドラマがどのように作られうるのか。ドラマ制作・シナリオ制作の実践者の生の声を聴きながら、確認する必要があるのではないか。

以上の3つの課題については、研究分担者の堀田あけみが主に取り組むこととなった。

(8) ラジオ放送局の存在意義

*ワークショップ「ラジオ番組企画書を作ろう」(2019年11月8日、椋山女学園大学、講師：安藤美国、進行：堀田あけみ)

(9) 現代的な技術を駆使した音楽表現

*講演兼聞き取り調査「音楽する身体の発見 音声合成技術の進化をたどって」(2019年10月25日、椋山女学園大学、講師：安藤美国、進行：堀井泉希)

(10) 現代のメディア環境におけるドラマ制作の実践

*ワークショップ「物語を動かせ!明日から役立つシナリオ講座」(2022年10月28日、11月18日、12月9日、椋山女学園大学、講師：宮村優子、コーディネーター：堀田あけみ)

(11) まとめ

「21世紀のメディア環境」は、ネットを介した視聴覚情報の送受信を軸に、即時性の強いコミュニケーションを可能にしたが、視覚的情報を制限して聴覚的な情報に特化した、ある意味限定された表現技術によっても、人間は聴覚性以外の感性を拡張しうるということが明らかになった。

「ラジオドラマ」というメディア表現は歴史的に構築されたものであったとしても、その表現に内包される様々な特徴は、別のメディア表現の契機にもなることがわかった。物語文化そのものは大衆文化に位置づけられうるものではあるものの、学校教育の課題ともシームレスに繋がるものでもある。

「21世紀のメディア環境における「ラジオドラマ」の意義」については、実はまだまだ解決しきっていない問題が残っている。たとえば今日の視覚的な文学受容として、「電子書籍による読書」というものもあるが、電子媒体はマルチメディア化であるにもかかわらず、なぜ電子書籍は「無音」であるのか。しかしながらその一方で、Amazonの「オーディブル」のような「本を読む時間のとれない忙しい人のための、音声で物語を楽しむサービス」に一定の需要があるとはどうということなのか。こうした少なくない課題についても、今後引き続き取り組んでいきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 広瀬 正浩	4. 巻 53
2. 論文標題 寺山修司のラジオドラマ：「まんだら」における聴覚的表現の可能性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 椋山女学園大学研究論集：人文科学篇・社会科学篇・自然科学篇 = JOURNAL OF SUGIYAMA JOGAKUEN UNIVERISTY	6. 最初と最後の頁 1～12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20557/00003318	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 広瀬 正浩	4. 巻 19
2. 論文標題 読者とその黙読の過程で耳にするもの：国語教材・文学作品の受容における聴覚性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語と表現 - 研究論集 -	6. 最初と最後の頁 5～16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20557/00003447	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 広瀬正浩	4. 巻 17
2. 論文標題 聴覚文化研究に関する講演・ワークショップ（2019年度）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語と表現 研究論集（椋山女学園大学国際コミュニケーション学部）	6. 最初と最後の頁 50,53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 広瀬正浩	4. 巻 80
2. 論文標題 「元号」に規定される想像力 アーバンギャルド『昭和九十年』の鑑賞技術	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 昭和文学研究（昭和文学会）	6. 最初と最後の頁 56,68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50863/showabungaku.80.0_56	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 広瀬正浩	4. 巻 16
2. 論文標題 機械を通じて“自然”を感じる 一九三〇年代の日本のラジオ放送における「生態放送」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語と表現 研究論集（椋山女学園大学国際コミュニケーション学部）	6. 最初と最後の頁 5, 19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 広瀬正浩	4. 巻 54
2. 論文標題 国語教育における朗読CD 範読の受容から逸脱するもの	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 椋山女学園大学研究論集：人文科学篇	6. 最初と最後の頁 27, 37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20557/00003520	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 広瀬正浩
2. 発表標題 読者とその黙読の過程で耳にするもの 聴覚性と文学との関係をめぐる理論的な整理
3. 学会等名 日本近代文学会東海支部
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	堀田 あけみ (HOTTA Akemi) (30555058)	椋山女学園大学・国際コミュニケーション学部・教授 (33906)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------